

東海大学医学部附属病院 広報誌

医療連携通信

2026
07

特集

医学部附属病院

新病院本部長・病院長・新任教授紹介



東海大学医学部附属病院

東海大学医学部付属病院

新病院本部長・病院長 新任教授紹介

今年度、東海大学医学部付属病院に渡辺雅彦病院本部長と小川吉明病院長が就任しました。2名の意気込みと新たに教授に就任した6名の医師の所属する診療科の強みや今後の方針、地域医療の発展に向けた抱負をあわせてご紹介します。

C O N T E N T S

病院本部長

渡辺 雅彦

p2

形成外科教授

花井 潮

p5

病院長

小川 吉明

p3

救命救急科教授

土谷 飛鳥

p5

呼吸器内科教授

伊藤 洋子

p4

遺伝子診療科教授

大貫 優子

p6

消化器内科教授

半田 修

p4

健診センター教授

井上 詠

p6

「先駆ける医学部・付属病院」へ 高度先端医療の開発・提供で地域医療に貢献

病院本部長

渡辺 雅彦

2026年4月1日付で、東海大学病院本部長に就任いたしました。2019年に病院長を拝命して以来、「断らない病院」「愛される病院」を合言葉に、地域完結型医療の構築に向けて力を尽くしてまいりました。この方針はこれからも変わりません。

東海大学医学部付属病院は1974年の開設以来、学園の創設者・松前重義博士が掲げた「ヒューマニズムと科学の調和」を理念として、神奈川県湘南西部地域における急性期医療の充実に努めてまいりました。2024年、医学部と付属病院が50周年の節目を迎えられたのは、地域の医療機関や関連機関の皆さまの多大なるご支援の賜物であり、あらためて心より感謝申し上げます。

医学部と付属病院は建学100周年に向けたビジョンとして、「先駆ける医学部・付属病院」を掲げています。効率的な組織体制の構築による経営基盤の強化を図り、高度先端医療の開発と提供で地域医療に貢献できるよう、職員一同が全力を注いでまいります。

病院長を務めた7年間、医療圏にある病院やクリニックの先生方とのつながりを深める取り組みを進めてきました。コロナ禍で希薄になった対面による交流を活性化し、“顔の見える関係”を再構築するために始めた「医療連携の会」は、今年で4回目となります。医療機関や福祉施設、行政機関などとの交流が深まったことで、多様な領域で新たな連携事業が始まっています。

伊勢原市と合同の防災訓練もその一つです。同市をはじめ、神奈川県や近隣医療機関、消防などと連携し、大規模災害発生時の対応力強化を図っています。また、1月には秦野市、伊勢原市との連携による救命救急活動における映像通報システム「Live119」の運用を開始したほか、当院が運用している神

奈川県ドクターヘリの離発着訓練を小田原市立総合医療センターで実施するなど、地域における救急医療体制の充実にに向けた取り組みが進んでいます。

「足し算」から「掛け算」で 付属2病院の有機的連携を強化

医療人材の養成や先端医療・高度医療の開発と提供を担う特定機能病院として特に力を注いでいるのは、「スポーツ医学」と「災害医療」の分野です。

スポーツ医学は、2024年度に文部科学省「高度医療人材養成拠点形成事業」の選定を受け、国内外の大学や研究施設と連携して、同分野における人材の育成や新たな治療法の研究開発などに取り組んでいます。その成果は、アスリートのパフォーマンス向上はもちろん、地域の方々のQOL維持・向上、健康寿命の延伸にも寄与できると考えています。

災害医療については、新型コロナの対応で得た経験や知見を生かし、感染症の予防やパンデミック対策を拡充しています。また、救命救急の専門医が、本学工学部の研究者や秦野市・伊勢原市共同消防指令センターの職員らと共同で、ドローンを用いた人命救助や捜索に関する研究も進めています。引き続き、両分野における人材育成や研究開発を推進し、地域の皆さまに還元してまいります。

特定機能病院としては、整形外科で行っている世界初の軟骨細胞シートによる変形性膝関節症の再生医療や泌尿器科における前立腺がんに対する新規治療法の開発等々の先進医療など、より“優しい”医療の開発と普及による社会貢献に努めています。

病院本部長として、医学部付属病院と同八王子病院の有機的連携のさらなる強化を図りたいと思います。これまで

「足し算」だった両院の関係を「掛け算」にしてシナジーを高め、一体となって地域医療に貢献することが目的です。両病院を1つの機関と捉え、診療科同士の協力関係を密にして人的交流を活発化し、医療やケアの質を高めていきます。

超高齢化や医療の高度化、AIの導入、働き方改革など、医療を取り巻く環境が大きく変化し、患者さんや家族のニーズが多様化しつつある今、求められているのは、地域の皆さまとのより緊密な連携と、患者さんにも医療者にも“優しい”医療機関であると考えています。その実現のために、ぜひ皆さまから忌憚のないご意見をお聞かせいただきたいと思います。真摯に耳を傾け、誠実に対応し、信頼される病院を目指して努力してまいります。

地域のクリニックや病院、関係機関の皆さまとの交流をこれまで以上に深め、250万人におよぶ医療圏の方々の健康を、共に支えていきたいと考えています。変わらぬご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。



●わたなべ まさひろ

1987年慶應義塾大学医学部卒業。博士（医学）。同大学病院などを経て、2000年アメリカ・コネチカット州立大学に留学。02年東海大学医学部外科学系整形外科科学に入職。19年から同大学医学部付属病院長を務め、26年4月同大学病院本部長に就任。専門は脊椎脊髄外科。日本専門医機構理事、日本整形外科学会理事、日本脊椎脊髄病学会理事長

人材育成とDX化で医療の質と安全を向上させ「地域完結型医療」を推進

病院長 小川 吉明

東海大学医学部付属病院は、特定機能病院として高度医療の提供と医療技術の開発を行うとともに、医師や看護師をはじめとする医療人材の育成を担っています。高度救命救急センターと総合周産期母子医療センターを擁し、急性期医療の中核的役割を果たすほか、がん診療連携拠点病院、がんゲノム医療拠点病院として、悪性腫瘍に対する専門診療を行っています。

新病院長として、渡辺雅彦前病院長が目標としてきた「地域完結型医療」を継続推進するとともに、4つの課題に取り組んでまいります。

1つは、高度医療の提供体制と地域との医療連携の強化です。当院では2024年度以降、「膵臓・胆道疾患」「炎症性腸疾患」「循環器疾患」「感覚器疾患」「乾癬・アトピー」「脳卒中」の6つのセンターを立ち上げました。いずれも、最先端の知見や医療をより多くの患者さんに還元するための機関であり、関係する診療科が連携し、専門医と多職種によるチームが適切な医療を提供するとともに、研究開発や専門医の育成に努めています。さらに、医療従事者向けの研修会や市民公開講座などを通じて、診断・治療法や予防法に関する情報提供も行っています。引き続き、各センターの特長や対象疾患、紹介・逆紹介の方法、診療の流れなどを、医療機関の皆さまや患者さんに分かりやすくお伝えする活動を進め、最新の医療を適時・適切に患者さんに届ける体制を整えてまいります。

地域医療連携については、毎年開催している「医療連携の会」や診療科単位の勉強会などを通じてニーズを把握し、皆さまで対話を重ねながら地域医療の充実や当院の改革に役

立ててまいります。患者さんの日常診療を担う地域の医療機関と高度急性期医療を提供する当院とが患者さんの情報を共有して患者さんを支える体制の強化は、特に重要です。ご紹介いただいた患者さんを適切に治療し、経過をしっかりと説明してお戻しするという循環をよりスムーズに実施できるよう、連携を深めたいと考えています。

2つめは、医療安全への対応です。医療の高度化や複雑化を背景に、個人の努力で医療安全を維持することは難しくなっており、組織的な取り組みが不可欠です。事故を未然に防ぐ仕組みや、迅速かつ正確に情報を共有できる体制を強化し、院内に「安全文化」を醸成・定着させて、安心して診療を受けていただけるよう努めます。

医療資源を有効に活用し 地域全体で患者を支える

3つめは、医療DXの推進と外来受付の仕組みの改善です。院内に対しては、AIの活用により診療記録作成などの負担を軽減することで、医師や看護師らが患者さんと向き合う時間を増やしていきます。

外来受付については、比較的に余裕のある午後の外来診療への誘導や、待ち時間が分かるシステム、待ち時間を有効活用できる仕組みをつくり、「お待たせしない病院」「待ち時間が気にならない病院」を目指します。

当院ではこれまで、初診の患者さんが1日で検査と診断結果の説明を終えられるシステムを採用していました。しかし、検査日と診断結果の説明日を分けて、1回の在院時間を短縮してほしいとの要望も増えており、患者さんの希望に合わせて選択でき

るシステムを検討していきます。特に高齢の患者さんは複数の診療科を受診する場合が多いので、より効率的に受診できる仕組みも整えます。

こうした目的を達成するために何よりも重要と考えているのが、4つめの課題である人材の育成と確保です。専門分野に関する高度な知識・技術を有し、患者さんに寄り添える医療者の育成に努めてまいります。また、労働環境などを改善して良い医療者を確保し、患者さんにも医療者にも、「この病院でよかった」と思ってもらうのが目標です。

少子高齢社会が到来し、医療者の数も減少していく中で、地域の医療機関と当院の機能的な役割分担による効率的で質の高い医療の提供が、これまで以上に求められています。より多くの先生方と対話を重ねながら、限られた医療資源を有効に活用し、地域全体で患者さんを支える体制を構築してまいります。引き続きご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。



●おがわ・よしあき
1989年東海大学医学部卒業、98年同大学院医学研究科修了。博士(医学)。90年同大学医学部付属病院血液腫瘍内科に入職。2016年教授。2008年から同病院情報システム部長、19年から副院長を務め、26年4月病院長に就任。日本内科学会(専門医・指導医)、日本血液学会(専門医・指導医)

間質性肺疾患の診療体制を強化し 新たな診断・治療法の開発に貢献 地域連携で患者さんを支える体制を

呼吸器内科教授

伊藤 洋子

医学部医学科
内科学系呼吸器内科学領域



①診療科の強み・特徴 呼吸器内科では、肺癌、間質性肺疾患、喘息・COPD、感染症、睡眠時無呼吸症候群など幅広い疾患を診療しています。当科の強みは、これらの疾患に対して専門性の高い診断・治療を提供できることです。一方で、超高齢社会や家族構成の変化により、治療選択には生活背景への配慮も欠かせません。病気だけでなく患者さん自身を大切に、多職種・地域と連携した医療を心掛けています。

②今後目指していくこと 今後は、主に3つの取り組みを進めていきたいと考えています。第1に、間質性肺疾患の診療体制の強化です。間質性肺疾患は多様な病態を含み、診断も容易ではありません。専門外来を充実させることで、より高精度な診断と適切な治療につなげるとともに、病態解明や新たな治療法開発に結びつく研究を推進してまいります。第2に、地域医療連携のさらなる強化です。在宅酸素療法や栄養管理、緩和医療、終末期医療などは、地域の先生方との連携なくしては成り立ちません。それぞれ

の医療機関が強みを生かしながら患者様を支える体制づくりを進めていきたいと考えています。第3に、治験・臨床研究への積極的な参加です。大学病院として新しい診断法や治療法の開発に貢献し、その成果を地域の患者様に還元してまいります。

③地域の先生方へのメッセージ いつも大変お世話になっております。肺癌や間質性肺疾患などの専門性の高い症例のみならず、「少し専門医の意見を聞いてみたい」といった患者様でもお気軽にご紹介ください。当科では迅速な診療を心掛けるとともに、ご紹介いただいた患者様の診断や治療方針について、丁寧な情報共有に努めてまいります。今後も地域の先生方との連携を大切にしながら診療を進めてまいります。

【主な「認定医」「専門医」「指導医」資格】 日本内科学会認定総合内科専門医・指導医 / 日本呼吸器学会認定呼吸器専門医・指導医 / 日本呼吸器内視鏡専門医 / 日本がん治療認定医 / 日本禁煙学会認定禁煙指導医

【研究領域】 診療では、肺癌、間質性肺疾患、COPDを中心に、呼吸器疾患全般を幅広く担当しています。研究では、肺胞の恒常性維持に重要な肺胞上皮細胞に着目し、肺障害と修復機構の解明に取り組んできました。近年は加熱式たばこが呼吸器細胞へ与える影響について研究を進め、その成果を禁煙啓発や呼吸器疾患予防につなげることを目指しています。

「一人の患者様を組織全員で守る」 炎症性腸疾患（IBD）センターと連携し 迅速・的確な診断治療を提供

消化器内科教授

半田 修

医学部医学科
内科学系消化器内科学領域



①診療科の強み・特徴 消化管グループでは、「一人の患者様を、組織全員で守る」という姿勢を最も大切にしています。最大の特徴は、入院診療における徹底したカンファレンス体制で、毎日早朝と夕方に若手医師・スタッフ医師らが一堂に会し、全症例の病態を共有・議論します。こうしたコミュニケーションが、妥協のない「最適な医療」の選択を可能にしています。一方、外来は熟練のベテラン医師が担っています。確かな経験と実績に基づく迅速な診断により、スムーズに治療の軌道へと導きます。この重層的なサポート体制が全国レベルの医療の質を支えています。

②今後目指していくこと 小腸内視鏡や炎症性腸疾患（IBD）は「難しい領域」ですが、当グループは多科横断的なIBDセンターと連携し、迅速な検査と組織評価による最適治療の選択を目指します。来年春にはIBD指導施設としての認定申請予定であり、全国屈指の専門施設とするのが目標です。IBDの病変を評価するため、カプセル型小腸内視鏡やバルーン式小腸内視鏡を迅速に行う

体制を強化するとともに、IBDに対する生物学的製剤を「どの患者様に、どのタイミングで、どの薬剤が最適か」を見極めるプレジジョン・メディシンも推進します。最新の知見と技術を駆使し、患者様の長期的なQOL維持に直結する医療を確立していく所存です。

③地域の先生方へのメッセージ 「断らない、そして速やかにお返しする」循環を重視します。高度な精査・治療が完了した後は速やかに地域での管理に移行できるよう、治療方針を明記した診療情報提供書の迅速な作成を徹底します。また、専門的な判断を要する症例については、私を含めた専門医がダイレクトに応じる体制を構築します。「当科は先生方の高度な外注検査室」という意識を持ち、顔の見える双方向の連携を深めてまいります。先生方の「直感」を「確信」に変えるためのパートナーとして、一人の主治医に依存しない組織的な安心を提供いたします。疑わしい症例や治療に難渋するIBD症例がございましたら、当科をコンサルタントとしてお気軽にご活用ください。

【主な「認定医」「専門医」「指導医」資格】 日本内科学会認定医・指導医 / 総合内科専門医 / 日本消化器病学会専門医・指導医 / 日本消化器内視鏡学会専門医・指導医 / 日本消化管学会胃腸科認定医・指導医 / 日本炎症性腸疾患学会IBD専門医・IBD指導医 / 日本ヘリコバクター学会H.pylori感染症認定医 / 日本カプセル内視鏡学会認定医・指導医 / 日本抗加齢医学会専門医

【研究領域】 「小腸疾患の早期発見と低侵襲治療」に軸足を置き、カプセル内視鏡やダブルバルーン内視鏡を駆使した多くの診断・処置を経験しています。特に、クローン病における小腸狭窄への内視鏡的拡張術などに注力し、日本炎症性腸疾患学会の指導医を務めるほか、内視鏡生検での炎症病態の把握による治療の最適化を専門的に行っております。豊富な臨床実績をベースに若手医師への技術継承と研究の活性化を図り、IBD指導施設として全国にエビデンスを発信できる体制を整えてまいります。

AI による治療シミュレーション技術と 術前 3D モデルを顔面骨骨折治療に導入 より安全で正確な手術の実現を目指す

形成外科教授
花井 潮

医学部医学科
外科学系形成外科学領域



①診療科の強み・特徴 当科には神奈川県西部および静岡県東部を中心に多くの患者さんが受診されており、これまで多彩な症例を経験しています。特に顔面骨骨折は全国有数の症例数を誇るほか、口唇口蓋裂や小耳症などの先天異常、顎変形症、頭頸部・乳房再建、眼瞼下垂、皮膚腫瘍、あざに対するレーザー治療など幅広い疾患に対応しており、高い専門性を有する医師が診療にあたっています。また、医師同士が専門領域を超えて日常的に知識や経験を共有し、多角的な視点から治療方針を検討できることも強みです。さらに、国内外の学会活動や研究活動を通じて皆が専門分野の発展に取り組んでおり、最新の知見に基づいた診療を提供しています。

②今後目指していくこと 当科では、AI を活用した治療シミュレーション技術をいち早く顔面骨骨折治療に導入し、術前 3D モデルを用いた精密な手術を行っています。引き続き技術の高度化を進め、より安全で正確な手術の実現を目指します。また、これらの技術は頭頸部や四肢の再建にも応用可能であり、形成外科診療全

体の発展につなげたいと考えています。一方で、口唇口蓋裂治療などの伝統的な領域についても、より自然な顔貌と機能の両立を目指し、治療戦略のさらなる洗練を追求します。これまで培われてきた診療技術や知識を若手医師に継承するとともに、新たな時代の形成外科を担う人材の育成にも取り組んでまいります。

③地域の先生方へのメッセージ 地域医療連携において最も重要なのは、「顔の見える関係」であると考え、地域の先生方から気軽にご相談いただける関係を大切にしています。診療情報の迅速なフィードバックを心がけるとともに、症例検討会や講演会などを通じて情報発信を行い、患者さんが適切なタイミングで専門医療を受けられる体制の強化に努めてまいります。診断や治療方針に迷われる症例がございましたら、遠慮なくご相談、ご紹介ください。今後も地域の先生方との連携を大切にしながら、患者さんにとって最善の医療を提供できるよう努めてまいります。

【主な「認定医」「専門医」「指導医」資格】 日本形成外科学会 機構専門医・指導医 / 日本形成外科学会小児形成外科分野指導医・レーザー分野指導医 / 日本頭蓋顎顔面外科学会 代議員・専門医 / 日本レーザー医学会評議員 / 日本医学教育学会 代議員

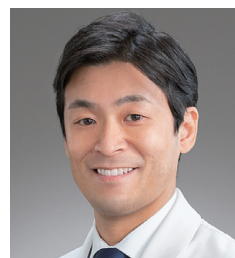
【研究領域】 「整容は顔面の機能である」という考えのもと、顎顔面外科領域の手術とそれに関連する臨床研究に取り組んできました。主な研究テーマは、術前顎矯正装置を用いた唇顎口蓋裂一期手術の言語機能および顎発育の長期成績の検討、口唇口蓋裂に特徴的な顔貌からの脱却を目指した骨格的手術計画（顎矯正手術・外鼻形成術）の検討、ならびに義眼台手術後の整容的・機能的評価です。今後も患者さんの QOL 向上と、社会の中で自分らしく生きるための後押しができる医療を目指してまいります。

「断らない救急」をさらに進化 病院前から社会復帰までを 切れ目なく支える体制構築に注力

高度救命救急センター所長 救命救急科教授

土谷 飛鳥

医学部医学科
総合診療学系救命救急医学領域



①診療科の強み・特徴 当センターは、湘南・県西および県央の一部を担当する三次救急医療施設です。「断らない救急」を理念として、心肺停止・多発外傷・重症熱傷・急性中毒・脳血管障害・急性冠症候群といった、あらゆる重篤な救急疾患に 24 時間 365 日対応しています。救急搬送された全ての患者さんの初期治療から集中治療までを一貫して担う体制が強みです。神奈川県ドクターヘリの基地病院であり、スキンバンク、急性中毒検査室、大型の高気圧酸素治療装置を備え、重症熱傷・急性中毒・減圧障害の診療には全国有数の実績があります。各診療科の専門医や多職種と連携したチーム医療も大きな特徴です。

②今後目指していくこと 「断らない救急」をさらに進化させ、病院前から社会復帰までを切れ目なく支える救急医療の構築に注力したいと考えています。ドクターヘリとドクターカーの質評価（Quality Indicator）やレジストリを活用し、データに基づいて地域全体の病院前救急医療の質を高めます。また、救命後の患者さんの長期予後・社会復帰（集中治療後症候群 post-intensive care syndrome

（PICS）対策）を重視し、リハビリテーションや退院後支援までを見据えた診療を展開します。あわせて教育・臨床研究にも力を注ぎ、次世代の救急医を育成しながら、エビデンスに基づく救急・集中治療を地域に還元してまいります。

③地域の先生方へのメッセージ 当センターは湘南地区メディカルコントロール協議会の中核病院として、救急隊員が担う病院前救急医療の質の向上を支援するとともに、症例検討会や Quality Indicator を用いた PDCA サイクルに取り組んでいます。勉強会や研究会を通じて地域の先生方との顔の見える関係づくりを進め、紹介・逆紹介を円滑にし、急性期を脱した患者さんは速やかに地域の先生にお戻りする体制のさらなる充実を図ります。重症・緊急の患者さんはもちろん、判断に迷う症例や時間外の急変などについても、どうぞ遠慮なく当センターにご連絡ください。今後も皆さまと力を合わせ、地域の皆様が安心できる救急医療を支えてまいります。

【主な「認定医」「専門医」「指導医」資格】 日本救急医学会 救急科専門医・指導医 / 日本集中治療医学会 集中治療専門医・指導医 / 日本外科学会 外科専門医 / 日本外傷学会 外傷専門医 / 日本 IVR 学会 IVR 専門医 / 日本プライマリ・ケア連合学会 認定医 / 社会医学系専門医協会専門医 / 日本臨床疫学会 認定専門医 / 日本航空医療学会 認定指導者

【研究領域】 救急・集中治療を専門とし、外科・IVR（血管内治療）の研究を経て、東京大学大学院で臨床疫学・公衆衛生学を修めました（博士（医学）/ 公衆衛生学修士）。大規模データを用いた臨床疫学研究を強みとし、重症外傷後の長期予後・社会復帰（PICS 対策）、ドクターヘリ・ドクターカーによる病院前救急医療の質評価、急性肺炎・敗血症の診療ガイドライン策定などに取り組んでいます。診療ガイドライン作成や多施設共同研究を通じて、エビデンスに基づく救急医療の発展に貢献しています。

地域に根差した遺伝診療拠点へ 遺伝子診断と適切な遺伝カウンセリングで 患者・家族を支援する

遺伝子診療科教授

大貫 優子

医学部医学科
基盤診療学系医療倫理学領域



①診療科の強み・特徴 当科は、遺伝性腫瘍や神経筋疾患、小児先天性疾病、難聴を含む遺伝性疾病、出生前診断（NIPT）など幅広い領域において、遺伝カウンセリングと遺伝学的検査を提供しています。また、がんゲノム医療拠点病院として、臨床腫瘍科との連携によるがん遺伝子パネル検査を実施しています。2025年度の外来総受診数は1,000件を超えています。当科の強みは、遺伝診療を専門とする医師・スタッフが、完全予約制・個室対応で丁寧な遺伝カウンセリングを行う体制にあります。遺伝性疾患の患者さんや、その疑いがある患者さんご本人のみならず、そのご家族・血縁者の方々のご相談にも対応しております。

②今後目指していくこと これまで以上に、地域に根ざした遺伝診療の拠点となることを目指します。遺伝医療の対象領域は急速に拡大しており、患者さんのニーズも多様化しています。各領域の専門家や院内他科と緊密に連携しながら質の高い診療体制の強化を図ってまいります。また、私の専門領域である神経難病について

も注力いたします。遺伝性神経筋疾患の患者さんご家族は、大きな心理的・社会的負担を背負っており、治療の選択肢が広がる中で、正確な遺伝子診断と適切な遺伝カウンセリングの重要性がさらに高まっています。患者さんご家族が、正しい情報をもとに治療や生活設計について自らの意思で考えられるよう、中立的な立場から寄り添う支援を充実させてまいります。

③地域の先生方へのメッセージ 遺伝診療は、かかりつけ医や専門診療科のご紹介から始まるのがほとんどです。地域の先生方に当科の役割や対応できる相談内容、ご紹介いただくタイミングなどの情報を積極的に提供するとともに、遺伝カウンセリングの結果や遺伝子検査の内容を分かりやすくフィードバックできるよう、報告書の充実にも取り組みます。遺伝診療に関わる場面は急速に広がっています。先生方が日常診療の中で遺伝に関わる問題に直面した際にお役に立てよう努めてまいります。どうぞお気軽にご相談・ご紹介ください。

【主な「認定医」「専門医」「指導医」資格】 日本人類遺伝学会・日本遺伝カウンセリング学会臨床遺伝専門医・指導医 / 日本内科学会認定内科医 / 日本神経学会神経内科専門医

【研究領域】 当院に遺伝子診療科が創設された2006年から遺伝性疾患の診療とゲノム解析研究に従事し、診断技術が急速に進歩する中で、多くの患者さんやご家族の遺伝カウンセリングに関わってまいりました。一方、医療倫理学領域の一員として遺伝医療倫理の研究にも取り組み、遺伝情報の取り扱いや発症前・出生前診断における意思決定支援など、他の診療分野とは異なる倫理的課題と向き合っております。こうした臨床と倫理の両面にわたる経験が、現在の診療を支える基盤となっています。

健診から専門治療までの橋渡しを円滑化 「抗加齢ドック」の運用で 予防医学・健康長寿医学を実践

健診センター教授

井上 詠

医学部医学科
総合診療学系健康管理学領域



①診療科の強み・特徴 健康管理学領域では、医学部附属病院と附属八王子病院における人間ドック・健康診断・予防医学・産業保健を担いながら、総合内科的視点に基づく診療を行っております。健診異常の早期発見から精密検査、専門診療、生活習慣改善までを含めた継続的な医療介入を重視し、各診療科と密接に連携して健診から専門治療への円滑な橋渡しを実現しています。また、付属東京病院で実施していた「抗加齢ドック」を昨年当院健診センターで開始し、予防医学・健康長寿医学の実践に取り組んでいるほか、消化器疾患や心疾患、動脈硬化性疾患の早期発見にも注力してまいります。健診データベースを活用した予防医学などの研究も進めております。

②今後目指していくこと 「病気を早期発見する医療（二次予防）」に加え、「病気を予防する医療（一次予防）」をさらに発展させ、健康寿命延伸に貢献してまいります。「疾患の早期発見」はもちろん、「健康寿命延伸」や「生活機能維持」をより重視した抗加齢医療も推進いたします。また、生活習慣病の重症化予防、健診データベースを活用した

予防医学研究、AIやデジタル技術を活用した健康管理などに積極的に取り組みたいと考えております。研究成果を地域医療へ還元するとともに、予防医学と総合診療の視点を持つ次世代医療人の育成にも力を注いでまいります。

③地域の先生方へのメッセージ 地域医療連携において最も重要なのは、「顔の見える関係」と「迅速な情報共有」であると考えております。健診後の精査依頼や事後フォローの依頼に際しては、分かりやすく丁寧な情報提供を心がけ、紹介後の経過報告や逆紹介を含め、患者さんが安心して地域と大学病院を行き来できる体制づくりを重視してまいります。特にがん検診では、要精密検査判定後の精密検査受診率向上が重要課題であり、地域の先生方との密接な連携が不可欠です。「相談しやすい大学病院」「紹介して良かったと思っただけの大学病院」を目指して努力してまいります。健診異常の精査、消化器疾患、生活習慣病管理など、どのようなことでもお気軽にご相談いただければ幸いです。

【主な「認定医」「専門医」「指導医」資格】 日本内科学会総合内科専門医 / 日本消化器病学会専門医・指導医 / 日本消化器内視鏡学会専門医・指導医 / 日本肝臓学会専門医 / 日本大腸肛門病学会専門医・指導医 / 人間ドック健診専門医・指導医 / 日本医師会認定産業医

【研究領域】 大腸がん検診においては、便潜血検査陽性者の精密検査受診率向上や、健診データベースを活用した大規模解析に取り組み、検診の有効性向上や死亡率低下に資する研究に従事しております。予防医学の観点から健康寿命延伸に寄与するため、人間ドックや健診のデータを用いた生活習慣病、動脈硬化危険因子、消化器疾患に関する臨床研究を行っているほか、デジタル技術やAIを活用した健康管理、健診データベース研究も進めており、その成果を地域医療に還元したいと考えています。

急性期診療の中核拠点「脳卒中センター」を開設 高度医療を24時間365日体制で提供

東海大学医学部附属病院に今年度、「脳卒中センター」(CSC = Comprehensive Stroke Center)を開設しました。当院がこれまで取り組んできた、24時間365日体制による急性期脳卒中診療の体制を強化し、地域の中核拠点としてよりスムーズな患者さんの受け入れを目指します。

当センターは、診療体制や設備、治療実績、教育体制などに関する厳格な基準を満たした、日本脳卒中学会の「一次脳卒中センター(PSC=Primary Stroke Center)コア施設」に認定されています。「時間との闘い」といわれる治療に対応するため「脳卒中ホットライン」を導入し、脳卒中の疑いのある患者さんの救急搬送時には、脳神経内科と脳神経外科、救命救急科、放射線科の医師や看護師、臨床工学技士らが連携して迅速かつ的確に処置を行うよう力を尽くしています。

患者さんの到着時には、直ちにCTやMRIによる画像診断を行い、適応を厳密に判断した上で、虚血性脳卒中に対しては静注血栓溶解(rt-PA)療法、主幹動脈閉塞例に対しては機械的血栓回収療法などを行います。出血性脳卒中については、開頭クリッピング術や脳動脈瘤コイル塞栓術を行うなど、外科的治療と内科的集中管理を組み合わせた高度医療を提供します。

急性期の治療後は、速やかにリハビリテーションを開始し、専門の知識と技術を持った理学療法士や作業療法士、言語聴覚士が、機能回復の最大化と社会復帰を支援します。地域の回復期リハビリテーショ

ン病院やかかりつけ医との連携を強化して急性期治療後の逆紹介を円滑に実施し、より多くの患者さんを地域で支える循環型医療体制の構築も進めます。

退院後も安心して生活できるよう支援することも当センターの役割です。再発予防や生活習慣の改善指導、社会復帰の支援といった包括的なケアを、シームレスにサポートしていきます。さらに、研修会や公開講座などを通して医療従事者や住民に最新の知見や予防に関する情報を提供し、地域医療の発展に貢献してまいります。



5月16日には市民向けの公開講座も開催しました

紹介患者さんのご予約方法

■お申し込み方法

検査や受診などで患者さんをご紹介いただく際にはお電話にてご連絡ください。その後、「診療情報提供書(紹介状)」と「予約申込書」を医療連携室までFAXでお送りください。

受領確認後、「予約票」をFAXにてお送りいたします。検査によってはご案内とあわせて同意書を送付する場合がございます。同意書の内容を患者さんにご説明のうえ、署名・捺印後、速やかに送付ください。原本は患者さんにお渡しいただき、検査当日に持参するようお伝えください。

・診療情報提供書(紹介状)



https://www.fuzoku-hosp.tokai.ac.jp/institution/appointment/pdf/shinryou_teikyou.pdf

・予約申込書



https://www.fuzoku-hosp.tokai.ac.jp/institution/appointment/pdf/shinryou_yoyaku.pdf

診療情報提供書は、貴院書式でも結構です。その際には、患者さんに関する下記の項目を記載ください。

氏名(フリガナ)	電話番号
生年月日	来院希望日
性別	ご住所
当院受診歴の有無	受診希望の診療科(医師を指定する際は医師名も記載)

■ご予約受付時間

平日(月～金) 8時～18時

土曜(第1・3・5) 8時～15時

※休診日(日曜日・祝日・土曜日(第2・4)・12月29日～

1月3日(年末年始))を除く

※受付時間外にFAX頂いた際には、翌診療日の対応となります。診療科によっては、お申込み当日中にお返事できない場合があります。

■検査結果について

検査終了後1週間程度で各医療機関に郵送いたします。画像データはCD-Rで提供いたします。

■予約可能な項目

一般外来	初診	再診
	単純CT	造影CT
	冠動脈CT	MRI
各種検査	MRA	MRCP
	造影MRI	核医学検査
	筋電図検査	超音波検査

※検査によって紹介状に記載頂きたい事項が異なります。また、同意書の事前取得が必要となる検査もありますので、必ず当院HPをご確認ください。

■患者さんにお伝えいただきたいこと

予約当日は以下のものを持参のうえ、1階の「紹介・初診窓口」にお越し頂くようお願いいたします。

マイナンバーカードまたは資格確認書	
当院診療カード*	診療情報提供書(紹介状)
お薬手帳(薬の説明書)*	予約票
画像データ(DICOM形式)	検査結果等*
医療連携手帳	母子手帳*

※はお持ちの方のみ

お申し込み・お問い合わせ

医学部附属病院 医療連携室

TEL: 0463-93-8495 (直通)

FAX: 0463-93-1125

ご要望・ご感想などをお寄せください

本誌で今後取り上げてほしいテーマやご感想などをお気軽にお寄せください。いただいたご意見は今後の誌面づくりの参考にさせていただきます。

連絡先 / prtokai@tokai.ac.jp